

原著論文

剣道における技の体系の変遷過程に関する研究 —竹刀に着目して—

坂本太一¹⁾, 矢野裕介²⁾, 八木沢誠³⁾

¹⁾ 岐阜薬科大学基礎教育大講座, ²⁾ 日本体育大学社会貢献推進機構, ³⁾ 日本体育大学体育学部

A study of the transition process of the system for Kendo techniques —focus on the shinai—

Taichi Sakamoto, Yusuke Yano, Makoto Yagisawa

Abstract: The system of Kendo techniques first included *Kenjyutsu 68 tte* formalized by Chiba Shusaku (from “*Chiba Shusaku Sensei Jikiden Kenjutsu Meijin Hou*” published in 1884), based on strikable target areas (head piece, gauntlet, chest plate, and thrusts to the throat). This was passed on to Takano Sasaburou’s *Shuhou 50 Shu* published in “*Kendo*” (1915), and was in turn inherited by Tominaga Kengo’s “*Mottomo Jissaitekina Gakusei Kendo no Sui*” (1926). This study aims to clarify how the *shinai* itself has changed over time, focusing on transitions in the system of Kendo techniques, analyzing how Kendo equipment (the *shinai*) have previously been described in Kendo guides published in respective periods.

The following points can be set forth by summarizing the results assessed in this paper.

1. *Shinai* used before Tominaga Kengo’s “*Mottomo Jissaitekina Gakusei Kendo no Sui*” (1926) which completed the target-based technique system in Kendo, were similar to those used in the period when Chiba Shusaku’s *Kenjyutsu 68 tte* was explicitly stated.
2. The type of *shinai* adopted in Tominaga Kengo’s “*Mottomo Jissaitekina Gakusei Kendo no Sui*” (1926) was also similar to those used in the past. In regards to the sword’s size; however, a *shinai* with a longer length of 3-shaku 9-sun (approx. 120.0 centimeters) comes to be acceptable in addition to those of the conventional length of 3-shaku 8-sun (approx. 117.3 centimeters).

(Received: March 29 2013 Accepted: October 14 2014)

Key words: Kenjyutsu 68 tte, shuhou 50 shu, Tominaga kengo, The history of the transition process of Kendo equipment

キーワード: 剣術六十八手, 手法五十種, 富永堅吾, 剣道用具の変遷史

1. はじめに

現在の剣道の稽古は、「形による稽古と、竹刀を用いて決められた部位を打突し合う、竹刀打込稽古に分けられ、形の重要性は説かれているが、その主流は竹刀打込稽古になっているのが実態¹⁾である。

この竹刀打込稽古の技の体系 (= 打突部位別 (面, 小手, 胴, 突) の技の体系) は、弘化・嘉永年間 (1844 ~ 1853) に千葉周作 (以下、千葉と略記する) によって考案された「剣術六十八手」が始まりとされ²⁾, それは「明治, 大正, 昭和の三代にわたって、剣道界に大きな足跡を残した³⁾高野佐三郎 (以下、高野と略記する) の「手法五十種」を経て、富永堅吾 (以下、富永と略記する) の『最も实际的な学生剣道の粹』(1925) において技の体系が完成するまで、数十年の試行錯誤が

繰り返されてきた⁴⁾。現代剣道の技が、「千葉の考案した技を土台として変遷・体系化された⁵⁾」と言われるのはそのためである。

このように、明治期から大正期にかけて竹刀打込稽古の剣道の技の体系が精選されていった背景には、剣道が学校体育の教材として扱われるようになったことや、試合審判規則が制定されたこと等が関連しているとも推されるが、本稿では、その間における剣道用具⁶⁾ (竹刀) の変化によってそれが齎されたのではないかと考える。矢野 (2012) の論文では⁷⁾, 戦後の剣道ではその母体となったしない競技で用いられていた16割の「袋しない」を採用せず、それよりも硬く重い4割の「しない」が使用されることになったが故に、しない競技で打突部位として認められていた中段の構えに対する左小手が、安全性の確保 (打突時の怪我防

止)という点から削除されたことが明らかにされている。

これまで、剣道の竹刀の変遷に着目した歴史的研究は、大塚⁸⁾(1990, 1995), 坪井⁹⁾(1971), 中野¹⁰⁾(1972), 小林¹¹⁾(1985, 1986), 中村¹²⁾(1986, 1988, 1994, 2007), 矢野¹³⁾(2012)等の研究を挙げることができる。とりわけ中村(1988)の研究では、竹刀の長さが「安政2年(1855)に創設された幕府講武所において、『撓へ柄共總長さ曲尺にて三尺八寸より長きは不_レ相成」と規定¹⁴⁾されたことにより、「この基準が戦前までの竹刀の『定寸』¹⁵⁾であったと指摘されている。そのため千葉の「剣術六十八手」が、高野の「手法五十種」、そして富永の『最も实际的な学生剣道の粹』に示される技の体系へと精選されていく過程における竹刀の変化が詳細に論じられることもなかった。

以上より本研究の目的は、千葉の「剣術六十八手」で示された剣道の技の体系が、高野の「手法五十種」を経て、富永の『最も实际的な学生剣道の粹』で集大成される過程を踏まえ、その中で竹刀がどのように変化してきたのかを、「剣術六十八手」を基調として技の体系を取り扱っている剣道書に焦点化し、検討していくものとする。

2. 千葉の「剣術六十八手」にみる技の体系と竹刀

2-1. 千葉の「剣術六十八手」にみる技の体系

千葉の「剣術六十八手」が広く世に知られるようになったのは、明治17(1884)年、「姫路藩剣術師範をつとめた」¹⁶⁾高坂昌孝(以下、高坂と略記する)によって『千葉周作先生直伝剣術名人法』が刊行されたことを契機としている¹⁷⁾。そこで、本項は高坂の著作を通して千葉の技の体系化を検討するものである。

本書の「緒言」では、「予ガ弘化年間ヨリ北辰一刀流開祖ノ劍士千葉周作氏ノ門ニ入り修行スルコト八星霜、而シテ後師ノ許可ヲ得テ東京ニ擊劍所ヲ設立シ門人ヲ教導スルコト四星霜、其ノ間常ニ師ノ膝下ヲ叩キ劍道不明ノ條件ヲ質議難問ナセシ時、師ノ應答或ハ教諭ノ趣旨ヲ遺漏ナク記載シ、傍ラ予ガ多年經驗上所得ノ卑説ヲ附言シテ、終ニ一冊ト成セシモノ」¹⁸⁾であると述べられているように、高坂が「弘化年間千葉周作の門に入ってから修行十二年の間に経験上得たところ、師の応答や教諭の趣旨を筆録したもので、『剣術六十八手』の一引用者注]術理にわたって懇切丁寧」¹⁹⁾に説明されている。

本書に掲げられている「剣術六十八手」は、「面業」20手、「突業」18手、「籠手業」12手、「胴業」7手、「續業」11手から構成²⁰⁾され、「構え方」や技の繰り出し方の違い、足掛けや投げ技、北辰一刀流組太刀の技

表1. 千葉の「剣術六十八手」にみる技の体系^{*}

業の種類	「先」の技	「後の先」の技
面業	追込面, 起頭面, 直面, 諸手面, 片手面, 左構面, 右構面, 籠手懸面, 片手延面, 深籠手懸面	半身面, 諸手成面, 片手外, 摺揚面, 切返面, 地生面, 卷落面, 張面, 籠手引懸面, 鞆拂面
突業	諸手突, 片手突, 二段突, 表突, 押突, 籠手色突, 地生突, 突掛突, 三段突	抜突, 切落突, 籠手引懸突, 引入突, 利生突, 上段利生突, 上段引入突, 籠手外突, 卷落突
籠手業	深籠手, 並籠手, 左籠手, 起頭籠手, 上段籠手, 面色籠手, 居敷籠手	受籠手, 突拂籠手, 誘引籠手, 押籠手, 留籠手
胴業	籠手懸胴, 手元胴, 跳込胴	摺上胴, 抜胴, 立胴, 利生胴
続業	片手籠手面, 籠手張面, 籠手面胴突, 籠手突, 面足ガラ, 鞆張落面, 籠手外摺揚面, 左右胴, 一文字投, 抱揚, 組討の11手は打突部位を片手で連続して打つ技や, 相手の打突に対して投げ技で対応するもの	

^{*}高坂昌孝(1884)千葉周作先生直伝剣術名人法, 自刊:東京, pp.100-126より作成。

法を含んだ技等に特徴がみられた。

そして、これら「剣術六十八手」を「先」の技(しかけ技)と、「後の先」の技(応じ技)に分類すると、表1のように整理される。従って、千葉による「剣術六十八手」は各種の技が体系性をもってまとめられたものであったという事ができよう。

いうまでもないが、「剣術六十八手」は「刀」に変わる「竹刀」の操作術でもあることから、その長さ、重さ、柄の長さなどの違いによって操作の方法も微妙に異なってしかるべきである。だから千葉にとっては「竹刀」の長さ、重さなどは一定でなければならなかったと推される。それでは、この「竹刀」を操作するにあたって、どのような基準が定められてきたのだろうか。

2-2. 「剣術六十八手」が主流をなす時代における竹刀の変遷

明治17(1884)年に高坂によって発刊された『千葉周作先生直伝剣術名人法』では、千葉によって体系づけられた打突部位別の技の体系(=「剣術六十八手」)が示されたが、同書では竹刀に関する記述がないため、それが具体的にどのようなものであったのかについては確認することができない。そこでこれと時を同じくして刊行された根岸信五郎²¹⁾(1884, 以下、根岸と略記する)の『擊劍指南』を見てみると、竹刀について以下のように説明されているので²²⁾、取り上げたい。

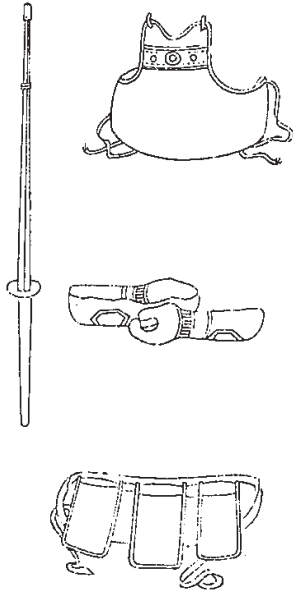


図1. 『撃剣指南』に掲げられている剣道用具にみる「竹刀」
(根岸, 1884, p. 18より転載.)

竹ヲ四条ニ割リテ組合セ元ヲ七寸乃至壹尺一二寸許リ革ヲ用テ包ミ之ヲ真剣ノ柄ニ擬シテ柄皮ト稱シ先ニ一二寸許ノ革ヲ用テ包ミ之ヲ真剣ノ切先ニ擬シテ先革ト稱シ柄革ヨリ先革ニ亘ル一条ノ弦通常綿弦ヲ用ユヲ刀背ニ擬シ道弦ト稱シ先革ヨリ七寸程ノ所ニ細革ニテ緊縛シ之ヲ中革ト稱シ鏝ハ堅牢ナル革ヲ用ヒタルモノナリ…中略…往古諸流派ニ於テ用ヒタル撓竹ノ寸法ハ三尺八寸ヲ定法トス是レ他ナシ技術及間合等ヲ習得スルニ便益巨大ナルニ因スルモノナリ

つまるところ、ここで解説されている竹刀の構造は、「竹ヲ四条ニ割リテ組合セ」²³⁾たもので、各付属品の名称を「柄皮」, 「先革」, 「中革」, 「鏝」と称し²⁴⁾ (図1参照), 長さは、「三尺八寸」²⁵⁾と定められており, その理由は「技術及間合等ヲ習得スルニ便益巨大ナルニ因スルモノナリ」²⁶⁾の文言に求められる。

その後、明治43(1910)年には、大日本武徳会剣道教士を務めた小関教政(以下、小関と略記する)によって『剣道要覧』が著されているが、本書では竹刀について以下のように解説されている²⁷⁾。

竹刀は柄とも三尺八寸を定寸とす。但し軀幹の長短により幾分を伸縮するも妨げなし。長短は一味軽重度あり。長短輕重は各自の随意とす。然れども輕き刀を持てば浮氣となり、從て業も輕佻に失す。重き刀を持てば沈着の態度となり、打ちも確かとなり、精神の修養にも適當なれども、力に合

はざる重量なる刀を持てば、機敏の動作を缺き敏捷なる業も出でず、死物となる畏れあり。死物とならず、輕佻に流れず、輕重宜しきを得可し。

ここで取り上げられている竹刀は、「柄とも三尺八寸を定寸とす。但し軀幹の長短により幾分を伸縮するも妨げなし」²⁸⁾と、身長に合わせてその縮尺が認められていることがわかる。なお本書では、竹刀の長さのみならず、その重さについても「長短輕重は各自の随意」²⁹⁾と言及し、「然れども輕き刀を持てば浮氣となり、從て業も輕佻に失す。重き刀を持てば沈着の態度となり、打ちも確か」³⁰⁾になると、竹刀の重さが剣道の技術に影響を与えることも説かれている。

同様の記述は、大正3(1914)年、児玉市蔵が著した『剣道ノ術理後編』でも確認できる。本書では、竹刀の長さを「三尺八寸」³¹⁾とするのみならず、その重さについても、「自己ノ體力ヲ顧慮シテ決定スル」³²⁾と述べ、「自己ノ體力ト竹刀輕重ノ比當ヲ得サレハ技術ノ進歩ヲ阻碍ス」³³⁾と解説しているのである^{34), 35)}。

以上のように、「剣術六十八手」が主流をなした時代における竹刀の変遷を、当該期に刊行された剣道書に焦点を当て分析してみると、根岸(1917)の『撃剣指南』で提示された竹刀の長さ(=三尺八寸)は、それ以後刊行された剣道書に引き継がれていったことがわかる。ただし、小関(1910)の『剣道要覧』の発刊を契機として、その長さについては、従前の長さ(三尺八寸)を踏襲するものの、各自の身長や体格に合わせてその伸縮を認めるようになったこと、さらには技術の進歩に繋がるとの考えから、その重さについても各自の体格に合わせて調節するよう説かれたことは注目に値する。しかし、その調節も「三尺八寸」を定寸としてなされていることを看過することはできない。

3. 高野の「手法五十種」(高野佐三郎『剣道』1915年)にみる技の体系と竹刀

3-1. 高野の「手法五十種」にみる技の体系

千葉の「剣術六十八手」は、高野の手によって「手法五十種」へと精選された。この「手法五十種」は、東京高等師範学校の総力をまとめ上げて上梓された高野佐三郎(1915)の『剣道』に掲載されており、本書の緒言において「最も多く遭遇し且つ最も有利なるものを選択」³⁶⁾したと述べられている。その内容は、「面業」, 「突業」, 「籠手業」, 「胴業」から構成されているように³⁷⁾、従前の技の体系(=「剣術六十八手」)に見られた「續業」が削除されていることがわかる。

以下の表2では、高野の「手法五十種」を「先」の技(しかけ技)と、「後の先」の技(応じ技)に分類した。これらの技は、千葉の「剣術六十八手」を土台として

構成されており、技の総数に限っては18手の減少を確認することができた。では、高野による打突部位別の技の体系化はどのように推し進められていったのであろうか。

まず始めに、千葉の「剣術六十八手」と高野の「手法五十種」における「面業」を比較してみると「手法五十種」では、「左構面」、「右構面」、「片手外」、「地生面」、「鞆拂面」、「片手延面」の6手、とりわけ片手で繰り出される技や北辰一刀流組太刀の「地生」という要素がある技が削除されている。一方で、「諸手正面」、「左構相上段面」、「右構相上段面」、「竹刀押へ面」の4手が新たに追加考案されていることがわかる

表2. 高野の「手法五十種」にみる技の体系*

業の種類	「先」の業	「後の先」の業
面業	攻め込み面、出頭面、正撃面、諸手上段面、片手上段面、左構相上段面、右構相上段面、張面、捨見面	半身撃面、諸手正面、抜面、摺上面、應じ返し面、捲落し面、押籠手面、攻籠手面、竹刀押へ面
突業	諸手突、片手突、二段突、表突、裏突、籠手押前突、出頭突	切落突、入突、上段變化突、捲落突、抜突、突返突
籠手業	應用籠手、擔ぎ籠手、上籠手、出頭籠手、上段籠手、捲籠手	摺上籠手、突拂籠手、右上段籠手、誘籠手、留籠手、居敷籠手
胴業	面籠手胴、籠手懸胴、鏝籠手	摺上胴、居敷胴、立胴、片手面胴

*高野佐三郎(1915) 剣道。剣道発行所：東京，pp.138-147より作成。

(表3参照)。ちなみに「剣術六十八手」の「左構面」と、「手法五十種」の「左構相上段面」が同様の技として引き継がれなかった理由について、以下二つの技の解説から比較を試みた^{38), 39)}。

左構面

向フ右同構ヘニ守リ居ルヲ、此ノ方ハ左足ヲ出シ上段ニトリ面ヲ打ツヲ云フ。時宜ニヨリテハ籠手ヲ打ツコトモアルベシ。

左構相上段面

双方共に左構上段にて守り居るとき上段より面を撃つ。時宜により籠手を撃つことあるべし。機熟するを待ち。敵より撃ち來らんとする所を撃つを可しとす。

上記引用から、前者は「向フ右同構へ」⁴⁰⁾(=下段星眼)になった場面で自らが「左足ヲ出シ上段」⁴¹⁾に構え、面を打突する技法である。対して、後者では「双方共に左構上段にて守り居る」⁴²⁾場面での打突技法で、「敵より撃ち來らんとする所」⁴³⁾すなわち、上段の構えから打突動作に入る瞬間を打つことが有効的であると説かれている。

これは、単に「上段」からの面技が引き継がれなかった訳ではなく、自らの構え方は同じでも、相手の「構え方」に対応して打つ機会が異なると解釈すべきであろう。なお、「右構面」と「右相上段面」を比較しても同様のことがいえる。

次に、高野の「手法五十種」に示される「突業」は、

表3. 「剣術六十八手」と「手法五十種」における面技の比較*

剣術六十八手	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	
	面技二十手	追込面	起頭面	直面	半身面	諸手成面	諸手面	片手面	左構面	右構面	片手外	摺揚面	切返面	地生面	捲落面	張面	籠手引懸面	籠手懸面	鞆拂面	片手延面	深籠手懸面
手法五十種	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18			
	面技一八種	攻め込み面	出頭面	正撃面	半身撃面	諸手正面	抜面	諸手上段面	片手上段面	左構相上段面	右構相上段面	摺上面	應じ返し面	捲落し面	張面	押籠手面	攻籠手面	竹刀押へ面	捨見面		

*高坂昌孝(1884) 千葉周作先生直伝剣術名人法。自刊：東京，p.100-108；高野佐三郎(1915) 剣道。剣道発行所：東京，pp.138-141より作成

表4. 「剣術六十八手」と「手法五十種」における突技の比較*

剣術六十八手		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
	突技十八手	諸手突	片手突	二段突	抜突	切落突	表突	押突	籠手引懸突	引入突	利生突	上段利生突	上段引入突	籠手色突	籠手外突	地生突	巻落突	突掛突	三段突
手法五十種																			
	突技十三種	諸手突	片手突	二段突	切落突	表突	裏突	入突	籠手押前突	出頭突	上段變化突	捲落突	抜突	突返突					

*高坂昌孝 (1884) 千葉周作先生直伝剣術名人法. 自刊: 東京, pp. 108-115; 高野佐三郎 (1915) 剣道. 剣道発行所: 東京, pp. 142-143 より作成.

千葉の「剣術六十八手」の「突業」18手よりも5手少ない13手となっている。これを千葉の「剣術六十八手」の「突業」と比較すると、削除された技は「押突」, 「籠手引懸突」, 「上段利生突」, 「籠手色突」, 「籠手外突」, 「地生突」, 「突掛突」, 「三段突」の9手で、例えば「向フノ下段ニ成ル處ノ透ヲ見テ、其ノマ、諸手ニテ喉ヲ目ガケ突キ掛ケ押シ行ク」⁴⁴⁾と説明される「突掛突」は、危険性の高い技であると推察することができよう。なお、新しく加えられた技は「裏突」, 「籠手押前突」, 「突返突」の3手である(表4参照)。

つづいて、高野の「手法五十種」にみる「籠手業」は、その数を12手とし、これを千葉の「剣術六十八手」の「籠手業」と比較すると、高野の「手法五十種」の「籠手業」では、千葉の「剣術六十八手」で取り上げられていた「並籠手」, 「左籠手」, 「受籠手」, 「押籠手」, 「面色籠手」が削除され、新たに「応用籠手」, 「上籠手」, 「摺上籠手」, 「右上段籠手」, 「捲籠手」の5手が追加されるに至っている(表5参照)。追加された5手の小手技を見てみると、「剣術六十八手」の「受籠手」⁴⁵⁾で示された「切り返す」という技法は、「手法五十種」における「摺上籠手」⁴⁶⁾のように、相手の打突を竹刀の鍔で摺り上げて打つという技法へと変化している。

また、「剣術六十八手」の「押籠手」⁴⁷⁾にみる「引き切る」技法や、「突拂籠手」⁴⁸⁾, 「誘引籠手」⁴⁹⁾, 「留籠手」⁵⁰⁾にみられた「小切りに打つ」(=コンパクトに打つ)という表現に対し、「手法五十種」で登場した「応用籠手」と「捲籠手」は「剣術六十八手」ではみられない技法(=下より捲く)を確認することができた^{51) 52)}。

応用籠手

敵中段我れ下段にて守り居る時、此方より敵の太刀の中程を押す。敵押さるまじと押し返す、押されつゝ其力を利用し敵の太刀を外づし敵の太刀の下より捲籠手に籠手を撃つ。

捲籠手

双方右と同じ構、敵より我が籠手を撃たんとする所を下より捲き小切に籠手を撃つ。

上記引用から、これら二つの技に共通して見られる、相手の太刀の「下より捲く」技法は、竹刀を振り上げる動作を省き、竹刀の下より早く小手を打突するための技法と判断することができる。この観点から「剣術六十八手」にみる小手の打ち方と比較すると、端的ではあるが、切り下ろす「刀」の操作術から「竹刀」でより早く打突する技法への変化をみることができると。

最後に、高野の「手法五十種」に掲げられる「胴業」は7手あるが、それを整理すると、千葉の「剣術六十八手」の中から削除されている技は「利生胴」, 「飛込胴」の2手であり、新たに「片手面胴」, 「面籠手胴」の2手が追加されたことがわかる(表6参照)。とりわけ、高野の「手法五十種」で新たに追加された「面籠手胴」は、「中段の構にて守り居る時、敵中段より下段に下げんとする所を一步踏み込み正面を撃ち、一步退きて籠手を撃ち、左足を踏み出し手を返して敵の右胴を撃つ」⁵³⁾と解説されるように、「面」, 「籠手」,

表5. 「剣術六十八手」と「手法五十種」における小手技の比較*

剣術六十八手		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
	籠手技十二手	深籠手	並籠手	左籠手	起頭籠手	受籠手	突拂籠手	上段籠手	誘引籠手	押籠手	留籠手	面色籠手	居鋪籠手
手法五十種		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
	籠手技十二種	応用籠手	擔ぎ籠手	上籠手	出頭籠手	摺上籠手	突拂籠手	上段籠手	右上段籠手	誘籠手	留籠手	居敷籠手	捲籠手

*高坂昌孝 (1884) 千葉周作先生直伝剣術名人法. 自刊: 東京, pp. 115-119, 高野佐三郎 (1915) 剣道. 剣道発行所: 東京, pp. 143-146 より作成.

表6. 「剣術六十八手」と「手法五十種」における胴技の比較*

剣術六十八手		1	2	3	4	5	6	7
	胴技七手	摺揚胴	抜胴	立胴	籠手懸胴	利生胴	飛込胴	手元胴
手法五十種		1	2	3	4	5	6	7
	胴技七種	摺上胴	居敷胴	立胴	片手面胴	面籠手胴	鏝羅胴	籠手懸胴

*高坂昌孝 (1884) 千葉周作先生直伝剣術名人法. 自刊: 東京, pp. 119-122; 高野佐三郎 (1915) 剣道. 剣道発行所: 東京, pp. 146-147 より作成.

「胴」の順に各部位を打突する連続技で、千葉の「剣術六十八手」には見られなかった技である。

以上より、千葉から高野へと各技数が増減した要因として、「剣術六十八手」に見受けられる「地生面」⁵⁴⁾や「地生突」⁵⁵⁾といった北辰一刀流組太刀の影響が強い技や、「續業」として挙げられる「面足ガラ」⁵⁶⁾、「一文字投」⁵⁷⁾のように相手の体や剣道具に手や足をかけて投げ倒すといった総合武術的要素を包含した技⁵⁸⁾

が高野によって分類⁵⁹⁾・削除されたと判断することができる。加えて、竹刀でより合理的に打突部位を捉える工夫と、それに対応した新しい技法 (= 打ち方) が追加・考案され、各技数に変化を来したとすることができよう。

3-2. 「手法五十種」が主流をなした時代における竹刀の変遷

高野の「手法五十種」では、千葉の「剣術六十八手」に示される「面業」14手、「籠手業」7手、「胴業」5手、「突業」10手の計36手が引き継がれる一方で、「諸手正面」, 「捲籠手」, 「面籠手胴」, 「突返突」などの計14手が新たな技として追加されているのであるが、そこではどのような竹刀が用いられていたのであろうか。

「手法五十種」が初めて明文化された高野 (1915) の『剣道』によると、「竹刀の長短軽重」という項目の中で、竹刀について以下のように説明されている⁶⁰⁾。

竹刀は柄を加へて三尺八寸を定尺とす。但軀幹の大小により幾分を伸縮するも妨げなし。長短軽重は各自の随意とす。然れども輕き刀を持てば精神輕佻に傾き技も亦輕卒織巧に陥るを免れ難し。重き刀を持てばおのづから沈着となり、打ちも確實となり、心身の鍛錬に適當なれども、體力に不相應なる重き刀を使用すれば動作の敏捷を缺き、技術も亦巧妙快速を致し難く、死物となるの虞あり。死物とならず輕きに失せず、長短軽重宜しき



写真1. 高野佐三郎『剣道』にみる剣道具と竹刀
(高野, 1915, 口絵より転載.)

を得る事に注意すべし。然れども練習の功を積むに従ひ體力も加はり最初重かりし刀も軽くなるものなれば、平生の練習には稍重き刀を用い馴るゝをよしとす。然して仕合の時には之より稍軽きものを用ふれば自在に技を演じ得るの利あり。要は我が力量に敵應するを可とす。

要するに、高野は「竹刀は柄を加へて三尺八寸を定尺とす。但軀幹の大小により幾分を伸縮するも妨げなし」⁶¹⁾と述べる一方で⁶²⁾、その重さについては個々の「力量に適應する」⁶³⁾ものを使用しなければならぬと指摘しているのである。この考え方は、前項で検討を加えた小関(1910)の『剣道要覧』に示されるものと一致する。

なお、本書では竹刀の構造に関する具体的な記述はないものの、その口絵には、当時用いられていた竹刀の写真(写真1参照)が掲載されている。

ここに取り上げられている竹刀と、それ以前の剣道書で取り上げられている竹刀とを比較してみると、その形状はほとんど変化していないことがみてとれるが、本稿では前者の竹刀の詳細を、多胡全(以下、多胡と略記する)が大正12(1923)年にまとめた『体育的学校剣道』に記されている竹刀から導き出したい。多胡は、本書の「はしがき」で「東京高等師範学校で専攻した教課内容(履修内容)を基本」⁶⁴⁾とした、と述べているように、その教授内容は同校で教鞭をとっていた高野の考え方が踏襲されたものだからである。

そこで、多胡(1923)が著した『体育的学校剣道』をみると、竹刀の長さは「三尺八寸」⁶⁵⁾(大人用)と定められ、各部位の名称は刀尖、中結、弦、鐙、柄、柄頭と記されている(図2参照)。

続いて、大正12(1923)年には、毛束柳太郎(以下、

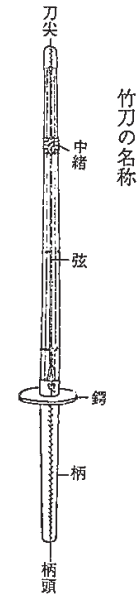


図2. 竹刀
(多胡, 1923, p. 88より転載.)

毛束と略記する)によって『竹刀之光』が刊行されているが、そこでは竹刀の長さや構造について以下のように説明されている⁶⁶⁾。

竹刀の事 竹刀は流義に依つて長短種々あるか普通は三尺八寸を以て使用するを善とす鏡新明智流の如きは四尺山岡一刀流の如きは三尺六寸を用いたり長きには遠きに技あり短きは近きに技ありと知るべし竹刀の束は鐙際を握り柄頭の脇に達する位を以て適當とす刀柄の長きは動きに鈍きを生し早伎の出ぬものなり又た弦の張方は柄皮鐙元より刀に通し緊結し中結は鐙元より三分の二位の處にて結束すべし竹刀は弦を背とし刀刃は此反對と知るべし

上記引用文から、本書では竹刀の長さを「三尺八寸」⁶⁷⁾とし、その組み立て方や構造は「弦の張方は柄皮鐙元より刀に通し緊結し中結は鐙元より三分の二位の處にて結束すべし竹刀は弦を背とし刀刃は此反對と知るべし」⁶⁸⁾と解説している。

加えて、大正13(1924)年、小川多仲(以下、小川と略記する)による『日本の武道剣法』でも、竹刀の「全長は概ね三尺八寸位」⁶⁹⁾とし、各部位とその名称について「刀身、刀柄の二部とす、刀身は、刀尖、刀背、刀刃の三部よりなり、刀柄は、刀把、鐙の二部より成る」⁷⁰⁾と説明されている。

以上のように、「手法五十種」が主流をなした時代における竹刀の変遷は、根岸(1884)の『撃剣指南』に示された竹刀の長さの基準(三尺八寸)及び構造が引

き継がれ、小関(1910)による竹刀選定の考え方、すなわち、剣道の技術向上のために各自の体格及び技量に応じた竹刀を使用することが認められるようになっていく。

4. 富永の『最も実際の学生剣道の粹』にみる技の体系と竹刀

4-1. 富永の『最も実際の学生剣道の粹』にみる技の体系

大正14(1925)年に富永によって刊行された『最も実際の学生剣道の粹』は、その「緒言」において、「恩師高野佐三郎先生、畏友故山本長次君・菅原融君・故松村素夫君・佐藤卯吉君・高野敬壽・室井正中君・水本泰君・笹淵徹夫君に勞を煩はした」⁷¹⁾と説明されているように、東京高等師範学校剣道部の全面的支援を得て上梓された。本書の目的は、「剣道の奥義を説くものでもなく、特に斯道の新研究を發表するものでもない。剣道修行の實際に關する最も必要適切な事項を寫眞圖解を加へて至つて平易に述べ、以つて斯の道に志す學生諸子の參考に供しようとする」⁷²⁾ものであった。そのため本書の内容は、各技の解説が中心となっている。

ここでいう各技とは、従来の剣道の技の体系、すなわち千葉の「剣術六十八手」と高野の「手法五十種」とを勘考し再編されたものであるが、本書ではそれらを、「面業」、「籠手業」、「胴業」、「突業」に區別し、掲載している⁷³⁾。

さて、以下の表3から富永による技の体系化では、基本動作としての「面の撃方」や「籠手の撃方」の解説⁷⁴⁾が含まれていることが見てとれるが、これらを前項

と同様に「先」の技(しかけ技)と「後の先」の技(応じ技)に分類すると、相手の動き方に対応して、しかけ技か応じ技かを使い分けるといった、どちらの要素も含んだ技の解説が組み込まれるようになっている。

そこでまず「面業」についてみてみると、その数は20手あり、新しい認識となった「先」の技と「後の先」の技のどちらの要素も含んでいる技として、「張り面」⁷⁵⁾や「左片手右横面」⁷⁶⁾など6手が掲げられている(表7参照)。また、竹刀を払って打突する「拂ひ面」⁷⁷⁾や「相手と相接した場合に、後ろに退くと同時に面を撃つ」⁷⁸⁾「退き面」、 「左手を外し、右手をずらして柄の端を握り…中略…刺すやうに面を撃つ」⁷⁹⁾「刺し面」、 「右片手左横面」⁸⁰⁾などの計10手は、従来の技の体系にはみられない技であり、これらの技は富永独自の観点から新しく追加された技であると見なすことができる。一方、「左上段より面」や「右上段より面」のように、千葉の「左構面」と「右構面」と内容は変わらずとも、その名称を変えて引き継がれている技もある(表8参照)。

つづく「籠手業」の総数は14手に及び、「剣術六十八手」と「手法五十種」との「籠手業」と比較すると2手増えている。富永が示したこれら「籠手業」のうち、「他の部を撃ち、又は突いて、これより直に轉じて」⁸¹⁾小手を打つ「他の部より轉じて籠手」、 「拂ひ籠手」⁸²⁾、「退き籠手」⁸³⁾の3手は新たに追加された技であり、「間合が接近した場合」から打つ「退き籠手」の登場は先述した「退き面」と同様で注目すべき点である。また、高野の「手法五十種」より引き継がれた技は「捲き籠手」、 「擔ぎ籠手」、 「上げ籠手」、 「應じ籠手」、 「摺上げ籠手」、 「出鼻籠手」、 「上段より籠手」の

表7. 富永の『最も実際の学生剣道の粹』にみる技の体系*

業の種類	「先」の業	「後の先」の業	どちらの要素も含む
面業	面の撃方、左面、右面、籠手と見せて面、他の部より轉じての面、退き面、乗込み面、攻込み面、出頭面、切返し面、刺し面	摺上げ面、抜き面、捲落し面、應じ返し面	張り面、拂ひ面、左片手右横面、右片手左横面、左上段より面、右上段より面
籠手業	籠手の撃方、他の部より轉じて籠手、面又は突と見せて籠手、退き籠手、擔ぎ籠手、内籠手、出鼻籠手、上げ籠手、上段より籠手	應じ籠手、抜き籠手、摺上げ籠手、押へ籠手	拂ひ籠手、捲き籠手
胴業	胴業に就いて、右胴、左胴、面、籠手又は突と見せて胴、跳込み胴、他の部より轉じて胴、鐙糺合より胴、退き胴	摺上げ胴、拂ひ胴、抜き胴	居敷き胴
突業	突業に就いて、前突、表突、裏突、片手表突、片手表裏突、攻込み突、捲落し突	迎へ突、入れ突、籠手外し突	押へ突、拂ひ突

*富永堅吾(1925)最も実際の学生剣道の粹。慶文堂書店：東京、pp.94-168より作成。

表8. 「剣術六十八手」, 「手法五十種」, 『最も実際のな学生剣道の粹』にみる技(面技)の体系の変化*

剣術六十八手	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
	面技二拾手	追込面	起頭面	直面	半身面	諸手成面	諸手面	片手面	左構面	右構面	片手外	摺揚面	切返面	地生面	巻落面	張面	籠手引懸面	籠手懸面	鞆拂面	片手延面
手法五十種	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18		
	面技一八種	攻め込み面	出頭面	正撃面	半身撃面	諸手正面	抜面	諸手上段面	片手上段面	左構相上段面	右構相上段面	摺上面	應じ返し面	捲落し面	張面	押籠手面	攻籠手面	竹刀押へ面	捨見面	
『最も実際のな学生剣道の粹』	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
	面技二十手	左面	右面	拂ひ面	摺上げ面	籠手と見せて面	他の部より 轉じての面	退き面	張り面	乗込み面	抜き面	攻込み面	出頭面	切返し面	捲落し面	應じ返し面	刺し面	左片手右横面	右片手横面	左上段より面

*高坂昌孝(1884)千葉周作先生直伝剣術名人法. 自刊:東京, pp.100-108;高野佐三郎(1915)剣道. 剣道発行所:東京, pp.138-141;富永堅吾(1925)最も実際のな学生剣道の粹. 慶文堂書店:東京, pp.94-122より作成.

表9. 「剣術六十八手」, 「手法五十種」, 『最も実際のな学生剣道の粹』にみる技(小手技)の体系の変化*

剣術六十八手	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12				
	籠手技十二手	深籠手	並籠手	左籠手	起頭籠手	受籠手	突拂籠手	上段籠手	誘引籠手	押籠手	留籠手	面色籠手	居鋪籠手			
手法五十種	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12				
	籠手技十二種	応用籠手	擔ぎ籠手	上籠手	出頭籠手	摺上籠手	突拂籠手	上段籠手	右上段籠手	誘籠手	留籠手	居敷籠手	捲籠手			
『最も実際のな学生剣道の粹』	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14		
	籠手技十四手	轉じて籠手	他の部より	拂ひ籠手	見せて籠手	面又は突と	應じ籠手	捲き籠手	退き籠手	擔ぎ籠手	抜き籠手	摺上げ籠手	内籠手	押へ籠手	出鼻籠手	上げ籠手

*高坂昌孝(1884)千葉周作先生直伝剣術名人法. 自刊:東京, pp.115-119;高野佐三郎(1915)剣道. 剣道発行所:東京, pp.143-146;富永堅吾(1925)最も実際のな学生剣道の粹. 慶文堂書店:東京, pp.122-139より作成.

表10. 「剣術六十八手」, 「手法五十種」, 『最も实际的な学生剣道の粹』にみる技(胴技)の体系の変化*

剣術六十八手		1	2	3	4	5	6	7				
	胴技七手	摺揚胴	抜胴	立胴	籠手懸胴	利生胴	飛込胴	手元胴				
手法五十種		1	2	3	4	5	6	7				
	胴技七種	摺上胴	居敷胴	立胴	片手面胴	面籠手胴	鏝糺胴	籠手懸胴				
『最も实际的な学生剣道の粹』		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
	胴技十一手	右胴	左胴	突きと見せて胴	面・籠手又は踏込み胴	轉じて胴	他の部より鏝糺合より胴	退き胴	摺上げ胴	拂ひ胴	抜き胴	居敷き胴

*高坂昌孝 (1884) 千葉周作先生直伝剣術名人法. 自刊: 東京, pp. 119-122; 高野佐三郎 (1915) 剣道. 剣道発行所: 東京, pp. 146-147; 富永堅吾 (1925) 最も实际的な学生剣道の粹. 慶文堂書店: 東京, pp. 139-154より作.

7手で、削除された技としては、片膝を着きながら小手を打つ「居鋪籠手」等がある(表9参照).

次に「胴業」は11手掲げられており、千葉の「剣術六十八手」、高野の「手法五十種」と比べて4手増えていることがわかる(表10参照).

これら「胴業」の中でも、「左胴」(=逆胴)、「退き胴」⁸⁴⁾、「摺上げ胴」⁸⁵⁾、相手の竹刀を左か右に払って胴を打つ「拂ひ胴」の4手は富永が独自に加えたものである。また、千葉の「剣術六十八手」から高野の「手法五十種」へと再編される中で消滅した「利生胴」⁸⁶⁾と同じような技法で繰り出される技(=「拂ひ胴」)が追加されている点も着目されるところである。その一方で、千葉の「剣術六十八手」から高野の「手法五十種」に継承されていた居敷きながらの「胴業」は、その数を1手(「居敷胴」)に減らしている。

最後に、富永の「突業」であるが、その数は12手掲げられ、「表突」、「裏突」、「攻込み突」、「拂ひ突」の4手が追加されている。また「前突」、「捲落し突」、「迎え突」の3手は、千葉の「剣術六十八手」から高野の「手法五十種」を経て、富永へ引き継がれたものであるが、「籠手外し突」のように、高野の「手法五十種」

では省かれていた技が、再び富永の技の体系で取り上げられているようになったものもある(表11参照).

以上から、富永(1925)の『最も实际的な学生剣道の粹』に示される剣道の技の体系は、千葉の「剣術六十八手」と高野の「手法五十種」とに示される技の体系が一部引き継がれる一方で、富永独自による技も考案されているのである。中でも、面技、小手技、胴技の夫々に、接近した間合いからの「退き技」が加えられたことや、相手の竹刀を払って打突する技法が追加されたことは注目に値する。

このように技が多様化した背景には、大正期における学校間での対抗戦や剣道大会が盛んになり、剣道がより競技化したことで、新たな技の繰り出し方が模索され、それらが有効な「技」として一般化していったと推察することができよう。

何れにせよ、本書「以降」に出版された打突部位別の技の体系を採用した剣道書のうち、富永の示した技や技術をこえる体系論が見当たらないことから、打突部位別の技の体系は富永によって完成⁸⁷⁾されたといえよう。

表 11. 「剣術六十八手」, 「手法五十種」, 『最も実際のな学生剣道の粹』にみる技(突技)の体系の変化*

剣術六十八手		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
	突技十八手	諸手突	片手突	二段突	抜突	切落突	表突	押突	籠手引懸突	引入突	利生突	上段利生突	上段引入突	籠手色突	籠手外突	地生突	巻落突	突掛突	三段突
手法五十種		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13					
	突技十三種	諸手突	片手突	二段突	切落突	表突	裏突	入突	籠手押前突	出頭突	上段變化突	巻落突	抜突	突返突					
『最も実際のな学生剣道の粹』		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12						
	突技十二手	前突	表突	裏突	片手表突	片手裏突	攻込み突	押へ突	拂ひ突	捲落し突	迎へ突	入れ突	籠手外し突						

*坂昌孝 (1884) 千葉周作先生直伝剣術名人法. 自刊: 東京, pp. 108-115; 高野佐三郎 (1915) 剣道. 剣道発行所: 東京, pp. 142-143; 富永堅吾 (1925) 最も実際のな学生剣道の粹. 慶文堂書店: 東京, pp. 154-168 より作成.

4-2. 技の体系化の完成と竹刀

剣道の技の体系 (= 打突部位別の技の体系) が完成したとされる富永 (1925) の『最も実際のな学生剣道の粹』では, 「剣道用具」という項目が掲げられており, その中では竹刀ついて以下のように説明されている⁸⁸⁾.

竹刀は刀剣の代用として修行の実際に用ひる所の大切な用具である. 竹刀の長短, 大小や, 軽重に就いては, 人によつて色々に説いて居るが, 大體其の人の年齢や體格, 體力の如何に據るべきもので, 大人は大人, 子供は子供, 身體が大きく, 體力が勝れて居る者はそれに適するやうに, 又體力が少ない者はそれに應ずると云うことが穩當である. 竹刀の長さは, 昔は一時餘程長いものを使用した者もあつたと云ふが, 今日では大人用としては三八と云つて三尺八寸, 三九と云ふ三尺九寸を普通とし…中略…子供のは勿論大人用よりは短く, 且つ細いのが當然で, 先づ小學の五六年であれば三尺四寸, 中學の二三年であれば三尺六寸位が適當であらう. 竹刀の重さは…中略…長さ三尺六寸位の子供用であれば百匁か百十匁位, 三尺八寸の小形であれば百二十匁, 中大であれば百三四十匁前後が適當であらう.

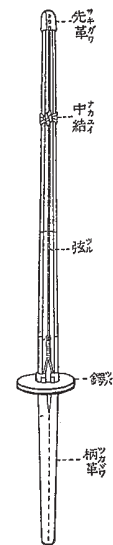


図 3. 竹刀
(富永, 1925, p. 236 より転載.)

上記引用文から, 富永は竹刀の長さについて「大人用としては三八と云つて三尺八寸, 三九と云ふ三尺九寸を普通⁸⁹⁾とし, これまでの剣道書に提示されなかった三尺九寸の長さを新たに付け加えている. また, 「小學の五六年であれば三尺四寸, 中學の二三年であれば三尺六寸位が適當⁹⁰⁾であると, 各年齢に対

剣道における技の体系の変遷過程に関する研究

表 12. 竹刀の長さを三尺九寸と定める剣道書*

年代	著者	書名	発行所	竹刀に関する記述
大正 15(1926)年	服部興覇	剣道教範	藤谷崇文館	大人用が三尺九寸
昭和 4(1929)年	平松登喜壽	剣道手引	近代文芸社	竹刀は三八と云ふて三尺八寸が定寸となつたのである、但し現在は中太と稍して三八とは稍太く三尺九寸の竹刀もあり
昭和 5(1930)年	高野弘正 佐藤卯吉	最新剣道教範	東京開成館	三八といつて三尺八寸、または三九といつて三尺九寸が普通
昭和 6(1931)年	大野熊雄 大麻勇次	新選日本剣道教典	帝国書院	身長に應じては三尺九寸も可である
昭和 8(1933)年	大庭俊一	初歩ヨリ奥儀迄剣道	潮文閣	現在は中太と稍し三尺九寸の竹刀もあり
昭和 8(1933)年	日本剣道 奨励会	図解説明最新剣道教範	藤谷崇文館	竹刀の長さは普通大人用が三尺九寸
昭和 11(1936)年	野間清治編	武道宝鑑	大日本雄弁会 講談社	現今三尺八寸(三八)三尺九寸(三九)が普通である
昭和 14(1939)年	剣道教育 研究会	文部省要目ニ準拠 剣道解説	西東社出版部	全長三尺八寸のものが常寸で、それより長くも一寸
昭和 14(1939)年	野間恒	剣道読本	大日本雄弁会 講談社	三尺九寸のものも相當廣く用ひられてをります
昭和 14(1939)年	剣道教育 研究会	剣道上達法	西東社出版部	全長三尺八寸のものが常寸で、それより長くも一寸
昭和 16(1941)年	小笠原三郎	剣道入門	野球界社	大人用としては現今三尺九寸のものも 相當廣く用ひられてある
昭和 16(1941)年	大庭俊一	入門より初歩まで 剣道読本	芳明堂	現在は中太と稍し三尺九寸の竹刀もあり

*服部興覇(1926) 剣道教範. 藤谷崇文堂: 大阪, p. 61; 平松登喜壽(1929) 剣道手引. 近代文芸社: 大阪, p. 19; 高野弘正・佐藤卯吉(1930) 最新剣道教範. 東京開成館: 東京, p. 27; 大野熊雄・大麻勇次(1931) 新選日本剣道教典. 帝国書院: 東京, p. 38; 大庭俊一(1933) 初歩ヨリ奥儀迄剣道. 潮文閣: 東京, p. 24; 日本剣道奨励会(1933) 図解説明最新剣道教範. 藤谷崇文堂: 東京, p. 61; 野間清治編(1936) 武道宝鑑. 大日本雄弁会講談社: 東京, p. 102; 剣道教育研究会(1939) 文部省要目ニ準拠剣道解説. 西東社出版部: 東京, p. 25; 野間恒(1939) 剣道読本. 大日本雄弁会講談社: 東京, p. 29; 剣道教育研究会(1939) 剣道上達法. 西東社出版部: 東京, p. 25; 小笠原三郎(1941) 剣道入門. 野球界社: 東京, p. 22; 大庭俊一(1941) 入門より初歩まで剣道読本. 芳明堂: 東京, p. 24より作成.

応した長さもより具体的に説明されている。

また、その重さについても、「三尺六寸位の子供用であれば百匁〔375グラム—引用者注〕か百十匁〔412,5グラム—引用者注〕位、三尺八寸の小形であれば百二三十匁〔450-487,5グラム—引用者注〕、中大であれば百三四十匁〔487.5-525グラム—引用者注〕前後が適當⁹¹⁾であると述べ、年齢と長さに対応した重さを詳細に明記している。

なお、その構造については、本書に掲げられている竹刀の図(図3参照)から明らかのように、従前の技の体系(=「剣術六十八手」,「手法五十種」)の中で用いられていた竹刀とほぼ同じであることがわかる。

このように、富永(1925)の『最も実際の学生剣道の粹』では、各年齢に応じた竹刀の長さや重さがより具体的に詳説されていたのであるが、ここで最も注目される点は、千葉の「剣術六十八手」や高野の「手法

五十種」が主流であった時代で用いられていた三尺八寸の竹刀より一寸長い三尺九寸の竹刀の使用が認められるようになったことである。そして同様の記述は、その後の剣道書にも踏襲されていくことになるのである(表12参照)。

5. 結 び

本論で検討した結果は以下のように整理される。

千葉によって体系化された剣道の打突部位別の技の体系(=「剣術六十八手」)は、明治17(1884)年に明文化され、大正4(1915)年に高野佐三郎によって「手法五十種」へと精選された。高野は竹刀を、その当時定寸とされていた長さ、すなわち三尺八寸と定めている。その長さが定寸とされていた理由は、明治43(1910)年に小関教政が刊行した『剣道要覧』にみられた。そこには、技術向上のために各自の年齢及び体格

等に応じた長さや重さの竹刀を使用することが適当であるとし、成人用の竹刀の長さを三尺八寸とし、これを定寸とすることが奨励されている。

その後、高野の「手法五十種」は、富永堅吾の『最も実際の学生剣道の粹』（大正14（1925）年）に示された技の体系へと継承されていったが、富永が奨励する竹刀の長さはこれまでよりも一寸長い三尺九寸が採用され、その重さも450グラムから525グラムと規定されるようになっていく。

以上、要する剣術（＝剣道）の技と竹刀の大きさ（長さ、重さ）との関連で考察すると次のように整理することができる。

千葉の「剣術六十八手」は高野の眼を通して「手法五十種」へと編みなおされ、富永が著わした『最も実際の学生剣道の粹』において集大成された。この高野から富永にいたる過程において剣道は学校間で対抗戦や競技会が盛んに行われるようになり、「構え方」の違いや、新たな技の繰り出し方、それに対応する「打つ機会」を多様に変化させながら技の体系化が推し進められていった。この一方で、竹刀はその技の体系の完成（＝剣道の競技化）を契機として、より遠い間合い（＝安全な距離）から相手を打突するためにその長さを一寸長くする必要があったといわねばならない。富永が提案した竹刀の長さ（＝三尺九寸）がその後の剣道書の中で引き継がれ、今日に至っているのはそのためであると考えられよう。

注記と引用・参考文献

- 1) 前坂茂樹（1994）剣道の技術の変遷—近代剣道の竹刀打突技術について—。鹿屋体育大学学術研究紀要, (11): 15.
- 2) 中村民雄（2007）今、なぜ武道か—文化と伝統を問う。日本武道館：東京, pp. 308–309.
- 3) 原田隣造編（1962）高野佐三郎。埼玉県立文化館：東京, p. 5.
- 4) 中村民雄（1995）剣道の技の体系と技術化について—打突部位の体系から対応の仕方による体系へ—。渡邊一郎先生古稀記念論集刊行会編。第一書房：東京, p. 232.
- 5) 前坂茂樹（1994）剣道の技術の変遷—近代剣道の竹刀打突技術について—。鹿屋体育大学学術研究紀要, (11): p. 15.
- 6) 「剣道用具」という用語は、剣道の技の体系化が完成したとされる富永堅吾著『最も実際の学生剣道の粹』の中で明記されており、本研究ではその剣道用具に含まれている竹刀に着目し検討を進めていく。
- 7) 矢野裕介（2012）戦後剣道の中段の構えに対する打突部位の変遷とその要因：しない競技から学校剣道への移行過程に着目して。体育学研究, 57(2): 527–543.
- 8) 大塚忠義（1990）のびのび学校剣道。窓社：東京, pp. 11–48.
- 9) 坪井三郎（1971）現代剣道講座第3巻。百泉書房：東京, pp. 199–216.
- 10) 中野八十二（1972）剣道の技術史。岸野雄三・多和田健雄編。大修館書店：東京, pp. 241–287.
- 11) 小林義雄（1985）剣道技術変遷史序説（そのⅡ）—用具の変遷との関連を中心に—。武道学研究, (17): 29–31, 小林（1986）剣道技術変遷史序説（そのⅢ）—用具の変遷との関連から（明治以降）—。武道学研究, (19): 27–28
- 12) 中村民雄（1986）木刀・竹刀・撓。剣道時代, 13(8): 56–60; 中村（1986）竹刀（しない）—その長さとお重さの変遷—。剣道時代, 13(9): 62–67; 中村（1988）絵画史料よりみた剣道の技術。体育の科学, 38(10): 801–805; 中村（1994）剣道事典—技術と文化の歴史—。島津書房：東京, pp. 91–107; 中村（2007）今、なぜ武道か—文化と伝統を問う。日本武道館：東京, pp. 213–228.
- 13) 矢野裕介（2012）戦後剣道の中段の構えに対する打突部位の変遷とその要因：しない競技から学校剣道への移行過程に着目して。体育学研究, 57(2): 527–543.
- 14) 中村民雄（1988）絵画史料よりみた剣道の技術。体育の科学, 38(10): 803.
- 15) 同上書：p. 803.
- 16) 渡辺一郎編（1971）史料明治武道史。新人物往来社：東京, p. 23.
- 17) 中村民雄（2003）近代剣道小史 近代剣道書選集別冊解説。本の友社：東京, p. 30.
- 18) 高坂昌孝（1884）千葉周作先生直伝剣術名人法。自刊, p. 1.
- 19) 渡辺一郎編（1971）史料明治武道史。新人物往来社：東京, p. 23.
- 20) 高坂昌孝（1884）千葉周作先生直伝剣術名人法。自刊：東京, pp. 100–122.
- 21) 根岸信五郎は旧越後長岡藩に生まれる。警視庁・宮内庁の剣術教師を務め、明治20（1887）年頃、有信館道場を建て子弟教育をする。明治44（1911）年、剣道の正科採用に際し教授内容の統一を計るため全国中等学校武術教師を対象に行われた第1回講習会において剣道理論を担当し、翌年の大正元（1912）年には大日本帝国剣道形制定の主席主査に選出され形の制定にも尽力し剣道界に大きな功績を残している。
- 22) 根岸信五郎（1884）撃剣指南。自刊：東京, pp. 18–20.
- 23) 同上書：p. 18.
- 24) 同上書：p. 18.
- 25) 同上書：p. 18.
- 26) 同上書：p. 18.
- 27) 小関教政（1910）剣道要覧。大日本武徳会山形支部：山形, p. 10.
- 28) 同上書：p. 10.
- 29) 同上書：p. 10.
- 30) 同上書：p. 10.
- 31) 児玉市蔵（1914）剣道ノ術理後編。和田忠次郎刊：京都, p. 49.
- 32) 同上書：p. 49.
- 33) 同上書：p. 49.

- 34) 同上書：pp. 49-50.
- 35) 兎玉は大正3(1914)年に『剣道修養法』をまとめているが、前掲書と同様に「全長三尺八寸ノモノヲ以テ練習シ…中略…自己ノ體力ト竹刀輕重ノ比當ヲ得サレハ技術ノ進歩ヲ阻碍ス」(兎玉市蔵(1914) 剣道修養法. 軍需商会：東京, pp. 12-13.)と、三尺八寸の竹刀を基本とするが各人に適応した竹刀を用いることが肝要と述べている。
- 36) 高野佐三郎(1915) 剣道. 剣道発行所：東京, p. 7.
- 37) 同上書：pp. 138-147.
- 38) 高坂昌孝(1884) 千葉周作先生直伝剣術名人法. 自刊：東京, p. 103.
- 39) 高野佐三郎(1915) 剣道. 剣道発行所：東京, p. 140.
- 40) 高坂昌孝(1884) 千葉周作先生直伝剣術名人法. 自刊：東京, p. 103.
- 41) 同上書：p. 103.
- 42) 高野佐三郎(1915) 剣道. 剣道発行所：東京, p. 140.
- 43) 同上書：p. 140.
- 44) 高坂昌孝(1884) 千葉周作先生直伝剣術名人法. 自刊：東京, p. 114.
- 45) 「受籠手」は「右同構へニ守り居ルヲ、向フヨリ此ノ方ノ面へ打ち來ルヲ、此ノ方太刀ヲ左ノ方へ取り受ケ留メ、其ノマヽ切り返シ向フノ右籠手ヲ打ツヲ云フ」(高坂昌孝(1884) 千葉周作先生直伝剣術名人法. 自刊：東京, p. 116)と解説されている。
- 46) 「摺上籠手」は「双方下段、中段等の構にて守り居り、敵より此方の面に撃ち來るを、我が太刀を右肩に取り摺り上げて敵の右籠手を撃つ」(高野佐三郎(1915) 剣道. 剣道発行所：東京, p. 144)と解説される。
- 47) 「押籠手」は「右同構へニ守り居ルヲ、向フヨリ此ノ方ノ面へ打ち來ル處ノ、其ノ右籠手ヲ太刀ニテ押へ切りニ引切ルヲ云フ」(高坂昌孝(1884) 千葉周作先生直伝剣術名人法. 自刊：東京, p. 118)と解説されている。
- 48) 「突拂籠手」は「右同構へニ守り居ルヲ、向フヨリ片手突キニテ此ノ方ノ右ノ方へ突キ來ルヲ、此ノ方ハ其ノ太刀ヲ右へ拂ヒ除ケ、向フノ右籠手ヲ小切りニ打ツヲ云フ」(同上書：pp. 116-117)と説明されている。
- 49) 「誘引籠手」は「双方下段星眼等ニテ守り居ルヲ、此ノ方ヨリ向フノ右籠手ヲ打タントスル色ヲ示シ、此ノ方ノ右籠手ワザト明ケワタセバ、向フ必ズ其ノ籠手ヲ打ち來ルモノナリ、其ノ處ヲ受ケ或ハ拂ヒナドシテ、向フノ右ノ籠手ヲ小切りニ打ツヲ云フ」(同上書：pp. 117-118)とされる。
- 50) 「留籠手」は「右同構へニ守り居ルヲ、向フヨリ此ノ方ノ右籠手へ打ち來ルヲ、此ノ方ハ鑿元ニテ留メ、其マヽ小切りニ向フノ右籠手ヲ打ツヲ云フ」(同上書：p. 118)と説明されている。
- 51) 高野佐三郎(1915) 剣道. 剣道発行所：東京, p. 144.
- 52) 同上書：pp. 145-146.
- 53) 同上書：p. 147.
- 54) 「地生面」は「右同構へニ守り居ルヲ、向フヨリ此ノ方ノ面へ打ち來ルヲ、此ノ方太刀ヲ向フノ諸手ノ中へ地生ニ引キ掛ケ、其ノ太刀ヲ早く引キヌキ、巻キ打チニ向フノ右横面ヲ打ツヲ云フ。但シ地生ニ引キ掛ケ云々ハ、當流ニテ唱フルコトニテ、別ニ六ヶ數コトニ非ズ。只向フヨリ打ち込ミ來ル其ノ兩手ノ中へ、此ノ方ノ太刀ヲ先ヲ引キ掛ケルヲ云フナリ」(高坂昌孝(1884) 千葉周作先生直伝剣術名人法. 自刊：東京, p. 105)と相手の面技に対し「諸手ノ中へ地生ニ引キ掛ケ」た後、技を繰り出している。
- 55) 「地生突」は「右同構へニ守り居ルヲ、向フヨリ此ノ方ノ面へ打ち來ル、其ノ兩手ノ内へ此ノ方太刀ヲ下タヨリ引キ掛ケ、扱早く引キヌキ諸手ニテ突クヲ云フ」(同上書：p. 113)と解説されている。
- 56) 「面足ガラ」は「右同構へニ守り居ルヲ、此ノ方ヨリ飛ビ込ミ打ち、太刀ノ當ラ爾當タラヌニ拘ハラズ、ソノマヽ足ガラニテ投ゲ倒ス」(同上書：p. 124)という技である。
- 57) 「一文字投」は「右同構へニ守り居ルヲ、向フヨリ此ノ方ノ面へ打ち來ル處ヲ、此ノ方身ヲ沈メ太刀ヲ右片手ニテ一文字ニ受ケ留メ、左片手ニテ向フノ右足ヲ捕り、右手ハ太刀ヲ持チタル儘ニテ、向フノ體ヲ強ク押セバ向フ能ク倒ルヽ者ナリ」(同上書：pp. 125-126)と解説される。
- 58) 小林義雄(1988)「剣術六十八手」と「手法五十種」の研究. 渡邊一郎編. 渡邊一郎教授退官記念会：東京, p. 132.
- 59) 「剣術六十八手」に示された「續業」は高野の「剣道」において別項を設け詳細に説明されている。
- 60) 高野佐三郎(1915) 剣道. 剣道発行所：東京, pp. 95-96.
- 61) 同上書：p. 95.
- 62) 高野は「上手は武器を擇ばず」と題した項目においても「數十年の経験により三尺八寸以内を以て最も適當のものなりと信ず」(同上書：p. 160)と三尺八寸の長さが最も適していることを強調している。
- 63) 同上書：p. 96.
- 64) 多胡全(1923) 体育的学校剣道. 今村嘉雄ほか編. 同朋舎出版：京都, p. 77.
- 65) 同上書：p. 88.
- 66) 毛東柳太郎(1923) 竹刀之光. 自刊：栃木, pp. 21-22.
- 67) 同上書：p. 21.
- 68) 同上書：p. 21-22.
- 69) 小川多仲(1924) 日本の武道剣法. 自刊：台湾, p. 136.
- 70) 同上書：p. 136.
- 71) 富永堅吾(1925) 最も實際的な学生剣道の粹. 慶文堂書店：東京, p. 2.
- 72) 同上書：p. 1.
- 73) 同上書：pp. 94-168.
- 74) これら打突の基本動作は、高野の「剣道」において「手法五十種」と別項を設けて詳細に解説されている。
- 75) 「張り面」は「相手と互いに構へて居る場合に、此方より進んで刀を張り、踏込んで撃つ場合と、相手が面に撃込んで來たのを、右又は左に張つて撃つ場合とがある」(富永堅吾(1925) 最も實際的な学生剣道の粹. 慶文堂書店：東京, p. 105)と説明されている。
- 76) 「左片手右横面」は「左片手で相手の右横面を撃つ業である。撃つには此方より踏込んで撃つ場合があり、又相手が攻込むか、撃つか、又は突いて來る時に施す場合がある」(同上書：p. 115)と解説されている。

- 77) 「拂ひ面」は「此方より相手の刀を右か右下, 又は左か左下に拂ひ, 切先を殺すと同時に, 踏込んで面を撃つ場合もあるが, 併し相手が面か, 籠手か, 胴かを撃て來, 又は咽喉を突いて來たのを拂つて撃つのが最も有利である」(同上書: pp. 100-101) と説明されている。
- 78) 同上書: pp. 104-105.
- 79) 同上書: pp. 114-115.
- 80) 「右片手左横面」は「右片手を以て相手の左横面を撃つ業」(同上書: pp. 115-118) と解説される。
- 81) 同上書: p. 124.
- 82) 「拂ひ籠手」は「刀で相手の刀を右に拂ひ, 右足より踏込んで籠手を撃つ場合があり, 又相手が籠手か右胴を撃つて來た場合に, これを右下に拂ひ, 突いて來た場合に, 右か右下に拂つて撃つ場合がある」(同上書: p. 125) とされる。
- 83) 「退き籠手」は「間合が接近した場合に, 體を退くと同時に籠手を撃つ業である。業を施すには, 體を退くと同時に其の儘籠手を撃つのであるが…中略…退き方は場合によつて左足より後に退いてもよいが, 左足を稍左後に退き, 體を僅かに左に交せば更に妙である」(同上書: pp. 129-130) と述べられている。
- 84) 「退き胴」は「鏝糶合, 又は相手に近い場合に, 體を退くと同時に胴を撃つ業で…中略…撃方は左足より後, 又は左後に退くと同時に右胴撃方の要領を以て右胴を撃ち, 左胴撃方の要領を以て左胴を撃つのである」(同上書: pp. 148-149) と解説されている。
- 85) 「摺上げ胴」は「相手が面を撃つて來た場合に, 刀を以て相手の刀を摺上げて胴を撃つ業」(同上書: p. 149) である。
- 86) 「利生胴」は「双方下段星眼等ニ守り居ルヲ, 向フヨリ進マントスル頭へ此ノ方太刀ヲ向フヘ眞直グニ延バセバ, 向フ突キ掛カルモノナリ。若シ其ノ突キノ外ヅルハ, 節ハ, 其ノマ、居敷キ胴ヲ打ツ」(高坂昌孝 (1884) 千葉周作先生直伝劍術名人法。自刊: 東京, p. 121) と解説される。
- 87) 中村民雄 (1995) 剣道の技の体系と技術化について—打突部位の体系から対応の仕方による体系へ—。渡邊一郎先生古稀記念論集刊行会編。第一書房: 東京, p. 223.
- 88) 富永堅吾 (1925) 最も實際的な学生剣道の粹。慶文堂書店: 東京, pp. 234-235.
- 89) 同上書: p. 234.
- 90) 同上書: p. 235.
- 91) 同上書: p. 235.

〈連絡先〉

著者名: 坂本太一

住 所: 岐阜県岐阜市三田洞東 5-6-1

所 属: 岐阜薬科大学基礎教育大講座保健体育学研究室

E-mail アドレス: sakamoto@gifu-pu.ac.jp